



練習風景1

ビーチームが一チームもなかった。同級生や知人に声をかけて必死に勧誘し何とか一五人をかき集めた。

試合に向けて仕事が終わってから夜の七時頃に集まり、小学校の校庭を借りてナイターで練習し、スクラムやラインアウトなどの基本的な練習を繰り返した。なんとか試合ができる状態になったので、私が代表して栃木県ラグビーフットボール協会の事務局に電話をし、対戦相手を紹介してもらおうことにした。

昭和五一年六月、初めての試合、ルールもよくわからない状態での対戦相手は栃木県で最も強い宇都宮市を本拠地とする白楊ラグビークラブであった。試合開始早々からトライの雨あられ、タックルに行っても触れることもで

きないまま時間がどんどん過ぎていき、このままシャットアウトかと覚悟した。後半もまさに終わろうとした時であった。チームで唯一ラグビー経験者であったナンバーエイトのS君が、スクラムサイドを抜いてそのままトライ、ゴールも決まった。そしてノーサイドとなったが、結果は八八対六だったと記憶している。

たったワントライでメンバーは狂喜乱舞し、試合後の宴会は大変な盛り上がりであった。この試合で私はラグビーの魅力にすっかり取りつかれてしまった。

試合前の異常なまでの緊張感と試合後の充実感、達成感、そしてメンバーとの強い連帯感、私が経験した他のスポーツでは得られなかった「何か」が



練習風景2

ラグビーにはあった。市役所に入って二年目、二五歳のときだったと思う。

この試合を契機に私の生活は、仕事以外はラグビーを中心に回っていくことになる。

この試合でワントライして気を良くしたわがチームは、正式に栃木県のラグビー協会に加入し、社会人リーグにも参加しようということになり、チームの名前を決めることになった。メンバー全員からチーム名を募集し、大議論の末決定した名前が「でんでん虫ラグビーフットボールクラブ」であった。

ほとんどの者がラグビー未経験の素人集団、へ歩みはのろいが角出して頑張ろう〜というのがネーミングの趣旨であった。

その年の秋のシーズンから社会人リーグに参加し、県内のチームと対戦したが、五年間ぐらいは勝ったり負けたりのレベルであったが、徐々に口コミでメンバーも増えてきた。

昭和五五年には栃木県で「栃の葉国体」が開催されたが、メンバーのひとりが県の代表選手として国体に参加し、栃木県は第三位となったが、メンバー全員で大応援団を結成し声援を送ったことを思い出す。

こうして少しは県内でも名前が知られるようになり高校、大学での経験者



不惑ラグビー交流試合
交流会のひとつときも楽しみの一つ！

も入部してくるようになってきて、練習の質も向上し、創部一〇年目頃になると県内のクラブチームではトップレベルの地位を保つまでになっていた。

平成三年三月、八八対六で完敗した宇都宮市の白楊クラブにも六対四という僅差ではあったが、ようやく勝つことができた。歩みののろいでんでん虫が角出して頑張り、一五年かかってやっと手に入れた一勝であった。

平成五年からは県内のクラブチームの大会では三年連続して優勝し、長野県の菅平高原で開催されていた関東クラブ選手権大会に栃木県代表として参加した。ニュージーランドのオークランドへ海外遠征に行ったのもその頃であった。

二五歳でラグビーと出会ってから一〇年間位は、私はプレーヤーとして純粋に勝負にこだわり、ひたすらチームを強くすること、勝つことにこだわり続けていたように思う。四〇歳頃からコーチの立場でクラブと関わるようになったが、社会人のクラブチームは、学生や企業チームとは異なり、仕事の転勤やメンバーの高齢化による引退などでメンバーの変動が激しく、チームのレベルを保つことは大変であった。

当時私はコーチでもあり、クラブでは年長者でもあるのでマネージメントを担当する立場にあった。運営面での

気苦労も多く、今思うと純粋にラグビーを楽しめていたのか、疑問に思う。

役所の仕事に加えてラグビークラブの運営という「もう一つの仕事」を持つていたようにも思う。

こうした私に転機が訪れたのは、「不惑ラグビー」との出会いである。

でんでん虫クラブのオーバードメンパーと地元大田原市の東芝那須工場ラグビー部のOBを中心に不惑チームを結成し、県の公式戦に参加するようになった。

東芝那須工場ラグビー部は当時、県内最強の企業チームで、OBには県の代表選手がたくさんいたが、勝負にこだわるラグビーを卒業し、純粋にラグビーを楽しみたいというメンバーが不惑チームに参加してきた。対戦相手は学生チームや社会人のチームであり、二〇代、三〇代前半の若い現役のチームである。当然にも試合はたいたい大差で負けることが多いが、結果はどうでもいい。

このチームのポリシーは、とにかくラグビーを楽しむこと、他のメンバーの批判は絶対に行わないこと、必ず全員が試合に出ること、そして美しいトライを目指すこと、である。自陣ゴール前からでも果敢にウイングまで展開し、繋ぎまくる。綺麗なトライが一つでも取れると勝ったも同然、メ

ンパー全員で喜び、居酒屋でうまい酒を飲む。

この不惑チームに参加したことで、私はもう一度純粋にラグビーを楽しむことができるようになったように思う。

不惑チームは、日曜日の練習が終わると、シャワーを浴びてからメンバーの家に集まって酒を飲む。スーパード酒とつまみを買って、割り勘すると一人一五〇〇円から二〇〇〇円。集まる家も順送り、ルールは奥さんに迷惑をかけないこと。奥さんがつまみをつくったりして接待してはいけない。今では一年中スカパーで世界中のラグビーが見られるので、好きなラグビーを見ながら酒を飲む。仕事の話はしない。この時間が私にはもつとも心休まる時間である。

平成一四年七月、でんでん虫不惑チームは、長野県菅平高原で開催された「全国不惑交流試合」に初めて参加した。

この大会は関西、東海、北陸、関東、東北地区の不惑チームが参加する日本では最も大きな不惑ラグビー大会である。参加資格は年齢が四〇歳以上であること、ルールは二〇分ハーフで入れ替え自由というものである。初めての参加であったが、試合結果は二勝一敗で勝ち越し、予想外の好成績であった。

土曜日に全国から不惑チームが集まり試合をして、夜には全チームが参加してアフターマッチファンクション（交流会）が行われる。参加チームが次々紹介され、クラブソング（部歌）を披露する。九〇歳代の参加者もいる。文字通り不惑ラグビーの祭典である。

この大会に初めて参加してから、でんでん虫不惑チームは毎年参加しているが、県内でのリーグ戦とは異なり、この大会ではなぜか勝負にこだわらない。年齢が概ね同じ条件、中高年のクラブチームという同じ土俵なので、やはり負けたくないのである。かつての転勤組もこの大会を楽しみにしており、遠く岡山や東京からも駆けつけてくれるし、今年アメリカへ転勤したメンバーもこの大会のために帰国するといっている。この大会には、これからも毎年参加したいと思っている。

また、去年の県のリーグ戦からは、大田原市にある国際医療福祉大学のラグビー部とでんでん虫不惑チームで合同チームを結成し大会に参加している。福祉大のラグビー部はメンバー不足で単独ではチームが組めない。同じ市内の不惑チームのオジサンたちが一肌脱ごうということになった。

学生達は二〇歳前後、オジサンたちは平均五〇歳というところだ。彼らは私の娘よりも若い。まるで親子合同の



練習風景3

ラグビーチームである。

学生達はラグビー経験の無い者が多く、ほとんど素人同然である。腹の出たメタボのオジサンたちがスクラムを何とか頑張つて、学生中心の快速バックスを走らせようという戦略でのぞんだが、結果は全敗であった。そんなにラグビーはあまくない。しかし、学生達と一緒にラグビーするのはすごく嬉しい。自分が若くなつたような気がしてくる。他の不惑のオジサンたちも私と同じ気持ちだと思ふ。

今年も親子合同チームを結成しリーグ戦に挑戦するつもりである。ところで、あと二年余りで私も定年となり公務員生活の「ノーサイド」をむかえることになる。

仕事とラグビー漬けの三十数年、定

年をむかえて仕事がなくなり、毎日が日曜日になったらラグビーだけが楽しみという生活にも何となく不安な気持ちになる。

何か新しい趣味を見つけなくては、最近妻の趣味である「バラの栽培」を手伝って肥料をやったり、剪定をしたりにしているが、どうもしっくりこないし長続きしない。

土曜日、日曜日になると車で五分ほどの距離にある河川敷のラグビー場に出かけてしまう。楕円のボールを触っているだけでいい、ボールに触れていないと不安になる。自分でも正直困つたものだと思う。

ところで、定年、六〇歳の還暦をむかえようと不惑ラグビーのルールではパシツの色が紺から「赤」に変わる。

不惑ラグビーは四〇代が白、五〇代が紺、六〇代が赤、七〇代が黄色、八〇代が紫色、九〇代がゴールドと決められている。

私もいよいよ赤パンを履かねばならない年齢に近づいてきた。

しかしである。私は定年で還暦をむかえても、年齢を詐称し「赤パン」を履かないと心密かに決めている。

私のラグビー年齢は永遠に五九歳で〈停止〉させるつもりである。